



女中庸教訓鏡 全

仁
2288



仁
2288

藤田の弟
特用

女仲人蒲

大正四年三月五日
藤田莊太郎氏贈

仙藤田

一夫人の素を親近する奉

る身一秋父母小家身

心興小能はくは秋心か

為なる考るるり男と

うしみ姑よめをふくむ事こと

まかりくは婦よめの心こころよりあいだ

くさ事ことへさけの素しのり

姑よめと婦よめを意いこ婦よめをあか

姑よめと孝このりりと謁つとあん

理ことわりあり扱あつかりり後うれ人ひと

孝こ公こうたのん人ひととあん

たすけは海うみ津つふ孝こ

あつ婦よめと界いああバあん

急いりいくくくくああん

孝うやうやりりああるるづづたた理りをを
人ひとにに縁ゆかりをを知しるる老らう
ありありてて極ごくににたたのの婦ふも
人ひとああららくくのの孝うやうや乃なたたのの
かりかりああららるるのの女に子こ婦ふの

いいちちとと一一切せきのの誠まこと
我わが子こ乃な素すををれればば其その男おとこ
姑あはれれれたたるる語ことば以もつててととししみみ
毫あひ毫ひととははくくももややああららずず思おも
屋やままののんんどどととちちととちちととちちととちちのの

女中

〇三

為こめふりよのびむふ速むふづむふたや
要とり速むふ了とま時ときふよとおくら傍むら心こころを
病つゆをつゆらりらりたのけけまませせも
婦よめにに容よう儀ぎああれれはは業ごうん
雙さう船せんのの形かたちのの金かね々々備び々々

ははららのの急いそりり急いそせせととせ
家いへららるるもも次つぎ弟あに小こ病びょう々々
なり目ひ小こ病びょう々々急いそんんの
出いまま々々會あひ釈らひ為まの事ごと々々
角ど々々志あり々々減へりり々々也や

後婦も他人の家へ嫁く
男小情洋姑小原孝小
甘んぢたりんん然も
何る波一ひま向小男姑の
氣小情ひま小好名を是

んやれそおりん心を
魚あれど波連角
志起水と睦まの陰の
考れ好くぬ枝安及び
て狗小倒ひ心の弁を於

事ことらうれおもと思おもふんくらふら

あうとあうとあ

つうく

留あ方う姑こりり事ことああららふふ

らら紫むらいいよよくく氣きふふささららひひ

和わををああららふふ老らう之の此この理ことをを

能よくく辨わけかつつ留あ方う姑このの事ことをを

仁に電でんののああららふふ事ことのの中ちゆう

んん得とくくく秋あき父ちち母ははららりりもも

大だい切せつ小せう和わ解かいくく能よくくつつららふふ

べべしし若わ者しや留あ方う姑このの行ぎやう業ぎやう小せう

河からら義ぎ事ことららふふととああららふふ事ことをを

是ら男姑のあはれは
何ら家身ふとあはぬ
事の有り名ふ名有り物
世と守城省く家る
ちと能く思ひ取入て

却て孝けれ實を竭せ
へ候合ふも男姑と
怨と咎むべし次第一
咎め怨みのん教たのん
是の天道ふと弁られ

女中

人及ぶも肯て不祥をとり

我身子孫の妻つたまを

ありと思ひくへ忌懼

たのば家内も能治り子孫も

榮利極ふれ四つくまがく

家名と傳へ奉り必終れ

理あり

姑小親よりのも從孝のそ

つまの婦とも和順へ

然るれ意味と能く理

會て男が姑小真実なり

孝行と濁すとべ

一婦人の幼穉時と親小

從ひ社の節のまゝ小娘ひ

老てらるゝ子小娘ふと三娘

の道と云り三娘のうち小

えまゝ小娘ふたよる金介小

孝行のれ一幼時親小娘

事と悉電の情をれば理

の常なり老ての娘子り

後ふの積累あつが一悲かんれしむひ
たのまの素ゆふり有あつたのま
唯ま文をん小ま後ごふ理りきまよ
理り念ねんまろくはは星せいおとま
福ふくく配はい偶ぐくくままのの印いんを

勤つとめ婦よめと内うちとちちららり
先ま文ぶんと主しゅ君くんれれとと恭こう
傳つたき婉わん婉わんづづ事ことなり
唐たう土ど小せう威いの女にょ嫁けしし程ほど
ままくくととまま疾しやく病びやうををららまま

容貌損じ愛れり女の親
堪がしく思ひて女と成
還とせしむも女は愛せし家
支の申うけ病を重き事も
我身乃不事も定まらば

奉けり古語小貞女ふ交
二女忠信不仕二君一夜
醜縁二くひ草も奉
乃家しとさあ却て親と
待て還らん意さうに

女中

たのつりまうらしろく父ちち母ははもこのけ
筋すぢ操さくとと威いどど恨うらみ泥どろてて度ど
還かへさんさん心こころをを止とどめめるるととああん
実まこと小こ有あり難がたききんん底ぞこあり
あつあつ村むらのの婦ふ人じん是こゝろとと能よ学まなび
ひ

及およぶよぬよととももんん小こ世よぐぐづづ死し
事ことどどうう婦ふ人じんのの心こころ貞ちか心しん
のの堅か固このの心こころ毒どく許ゆるももれれく
親おやのの海うみ仲な姪やめのの後あともも結むす納な
すすししくく已このれ堂どう意い奇き夫ふのの縁えんと

むま ひと ちせ みる を くら くら
契ひの一年の半季も産再
けり 小出の戸実と半種
夫婦れ 及と 離れ 他女小
嫁 先ま 支城 系 女れ 如く
見捨りの類ひ け 烈女の

ころ を せ
ん 操 を 威 松 柏 年
の 寄 小 洞 さう の 首 標
と 世 へ 學 へ
冬 来 へ 山 も 何 へ 宗
木 葉 へ 残 へ 松 へ

峯ふさびし花

此身の新古今久くは散る

在舟のんんま夏乃子

茶葉の本紅白色と交へ

巴がほふ燦爛まゆも

秋冬に烈嵐ふ散る本を

本葉も散れふあつめて

けし子程の花も黄雲満

山ふ一本もれきの節松

の青葉は常中終るとして

残まつると清り婦人共
節操もけりけ如く有
魚丸事哉の馬長は眼
とるまの支の國究り厄
木曾の麻布野絶く絶

別とて婦れ及と妻一能
事越云甲班まおんひの小
男ふつまたの彼と初まの實
小婦徳と竭一丈小事む
人とと地神明の空後夫

巖小幽閑き松と六目んてぬ

えん子草あふ木小秀るる

志子れ操ゆ以ふゆ

艾ゆあがりて棠んふりふ

葉と肌りて妻ふり小ゆ

孰恙

一婦人小婦煙婦么婦容

婦切れ口の行跡有牙一

婦煙とて氣變と能一

らび辭ます家煙かす次

嫉妬せむ 執疑せむ 次弟小主
賢好女に 嗜するを 知む
身二婦言也 一公家系を
慎く 拘事 魁魁いふ
か言古強く 後不淫

言考ゆ ぬどよ 執強て
為常 けりい 老人と せむも
巧言 するふ 女う 老を 魁
句 福に 悔し 家知り
才了 顔小 器も い 中

女中
七

都^{みやこ}く言^{ことば}遣^{つか}ひ小^こ深^{ふか}くは
九^{ここのへ}女^に乃^の云^いはれしは
い^いふ小^こ態^{たて}人^{ひと}り遇^あへも
に^にと^とり^りゆ^ゆる^るを^をま^まと^との
ら^らび^び中^{ちゆう}二^に婦^ふ容^{よう}也^や

粧^{まゆげ}容^{よう}れ^れ事^{こと}あり^{あり}新^{あたら}し^しく
小^こ身^みと^と流^{なが}梳^かけ^け粧^{まゆげ}衣^い着^きえ
紀^き居^い舉^あ動^{どう}神^{かみ}妙^{たえ}小^こま^まら^られ
類^{るい}之^の髪^{かみ}容^{よう}化^け粧^{まゆげ}衣^い着^きえ^えの
底^{そこ}ら^らと^と身^みの^の粧^{まゆげ}人^{ひと}く

女中
六

とらばしちりめ弟女乃
不業真実小勃めく解

るるるる

一継母の継子と魚のれ
を甚むりく歎き事ぞ

一継子と我子れ兄弟之
継糸血を賤興とといふ
と我子の父と骨肉と
領つるの子を我の夫婦
一神乃理小く一的為我

子之何とて継子とて六増湯
づたや私恩のんとして止
真実小室憐とて及び
はま六流母とて継とて
母と文字小も書り物と

合とて小も及物小及
物をばづぐは同とて
ある物とて小とて六接合
のくはとて小とて六
介の法とて取法とて小

似およみくといふて云そぬる小
親おやの形かたち小遠とがたしに必かならず降くだ小
たのりとのわんこころねきむしをむね
從あや者ものより況いふらんや人あんななるげんとや
飛と石いし仁にん乃な生なま稟れんつるとも

我われ小似およと養ま育いの憐あわれ
介そ抱ごん小これ家あ小似これの容や
易うべし或あるひは姑あうしやの愚あ記きを
養うて丈さつ小つ音ねの我親わがの
答とがと揚ある小ひ考こし終し子これ

けりべし 若くは 不弁らま
果るの 楫と絶つる 船乃
如くよる 方と ぬく 浮岩
ぬく 心 懐て 弟事不
つき 私をく 強子と 我子

とりのも 仁意の 訓と 愛
後なる 業事 弟一 舟の
一 支女 先生ん をひ 能く
支不 見人の 内へ 記の 舟一
海内 鬼ら 生 實を 事し 公 夫も

醜も力及老をばんと舉動ハ
若も形も悪もあつたれハ
弟候も大車よおくたえ
飛来死すての後も貞心と
懐べしとば二まふ見へん

本有海が起るは俗なる
侍と見るとに女は女ふ列るの
附の者沈沈の餘り葎餐
深衣のこゝろひまけきた
目殺納はめりぬれぬ遊者

と目く小跡く歎も遠ざ
かり哀も早晚く身を
をづく魚跡小ひりれ
浮名を流し恥と敬を
事ん夏するべし存生く事

村貞人獨坐して死せしむ
竹の翠小くあて志は
づまや熊又存せしむ
眼有し聞ありた秋身れ
恥を知りしやいん

女中

と能思ひて身と何ね
人小妻あつらひ次
一新古今集百歌嬬戒
乃意と護る
はくねるふきり人の

小妻存秋素あけね
素あけさねそ
男少てたふ耽淫の現世
後の世やも小室元飛空死
事あるに憎て女の耽淫

孝くく人の心も神も
魚果ありふくありく云べ
方なきは形滅べたて女
の乃の家をまゝくぬま
ゆる事へのぬまく貞女二

夫とる女とや中記と云書小
も刀えたり昔唐小姚玉
景といひ女子十六歳
少くも夫とれ父母憐て
又他女不配せん云及

いそで貞女乃道成女らん

也そ親の言兼ふも後そ

そそ寡所り後そけりそ家

ふ年來來列つる境乃一

獨有けりる雄失て雌そ

孤英雄ふも獨りそ死乃

けり姚玉景そ雌り云

中う汝も心所そは英雄ふ

配獨りたのれ自が念を

啄く自と同はきそ

あまのうらひに會わ継糸

そのあまのうらひに會わ継糸

うらひに會わ継糸

あまのうらひに會わ継糸

あまのうらひに會わ継糸

あまのうらひに會わ継糸

あまのうらひに會わ継糸

あまのうらひに會わ継糸

あまのうらひに會わ継糸

あまのうらひに會わ継糸

女中

女中

掛が

不^ず忍^あ更^さ離^さ死^び

昔^{その}時^う每^ぐ偶^あ去^く今^こ年^ん還^ん獨^ひ

歸^くと^あ夫^らと^と七^し秋^あ双^つ去^く

去^ゆて^き去^りつ^つる^る境^つの^だ今^こ年^ん

獨^{ひとり}去^りつ^つる^るよ^よと^とい^いつ^つる^るん^んと

古^こ人^ん悲^ま脱^ま去^り死^び又^{また}双^ふ死^び

と^の波^{なみ}又^{また}終^つつ^つる^る因^よ乃^の悲^あ死^び

深^{ふか}く^く去^りつ^つる^る色^{いろ}が^が改^かて^て他^た去^り

不^ふ姻^{いん}偶^ぐの^のい^いと^と堪^たつ^つ

也^やと^と心^こ成^じ今^こ以^いは^はあ^あ不^ふ

撥て雙花小娘ひそや
以つり穢小貞女の志
恥懐の名類も感下付
き増く人あつたり
名もつても如べらんや

一素女れ乃正し
内礼も家込る事昔
とて教ぬ行か能婦
の四種をば後意電之の意
深く留方姑小能はく

子孫と名を授け守る園の
の教はまじく賢女と云
宋玉の主人は伯姫とい
ふ有るは沛姫も夫は有
けり人々皆北教と云

一人の信下瘡もあといひ
けり花女の禮儀は三人
供はまじくあらし歩かせぬ
法とてあはれ終ふ焼
死のひかり此亦常と云

子^{うら}を^{うら}行^いと^い云^い女^にの^も鼻^は法^は刻^く
令^れ女^にの^ち職^し季^き女^にの^ひ母^は法^は刻^く
盧^ろ氏^しと^め同^じと^け枝^えと^そ捨^てし^て
眼^{けん}の^あ中^{ちゆう}に^あり^て賢^{けん}女^にの^あ名^なも
さ^さく^さ末^{まつ}代^{だい}の^か鏡^{かがみ}に^ある^る女^に

知^ちる^るか^かれ^れば^ば女^にの^あ禍^{わざはひ}ひ^ひか^かる^る
若^わき^きま^まの^あ女^にと^あ揚^ある^るを^あ厭^{いと}
一^いの^あ親^{おや}法^は和^わ令^れせ^せり^り免^{めん}
身^みた^たま^まを^あ光^{あかり}も^あ忍^{しの}慎^{しん}よ^よく
法^はを^あ目^めを^あら^らる^るを^あ保^{たも}保^{たも}妻^{さい}の^あ

つま 妻は若くは小よりのあはれは

よくついで 能く帰のたともへ

おとのそ 一凡女子ら他の家小は

りしり 一生身と仕と終るものあり

らき 身若くは若くはれは身を

このりも あこもは

保る不克古人も 難儀女

子百幸身若くは仕他人と宜

あつるれ 此言留方姑を

わ一家親類後教着属小

あつるれ 風波の属とさき

世間の人情なれば家かん小
約奉十に九つら思ひあふ
有海ぐぐ物小能忍を
以身を保の要とほぐま
懐忍のう文字ハ堪とま

忍ハ志のぶと訓又とら
つこも初り忍乃一字と
忘るも朋と一生身と保
終易やといふ書小を
忍の字ハ象と人の心乃

上小珠こたまれ如ごとき又またさうさうとと並なみ
こゝに比くらべり心こゝろのよよ小利せうり
又またを活かしし南なんたらんたらんよよら
身みと思おもひひの味あじにに徹とると
たたららべべるるはは能よ慎う之の徳とく慈じ

とと淑しゆ女子この端は煙えんとと云いへへ
一ひ百ひゃく行かうれれ皆みな事こともも徳とく慈じをを
のの身み一ひととと尺せき斤しん附つのの
情なさけとと慈あわれひひすす櫻いん小せう慈じ哉や
後あと一ひと途とををれれ身みとと込こへへ

荒くあな物いひしを管人と
託身と恨外見おの鬼女の
如くおの穢けがれ小女子こむすこつる人各々
家身けみ小省こさけとんと私わづかに
あとの堪たみおひ親戚うぢこ奴婢めかけに

我われまでまで義ぎ定ぢやうと身み小こは
一ひと夫人ふじんと仕つかをむむ小こ弟てい一ひと意い
愛あい深ふかくくもも為な徳とくとと恨うらみ懺あやまま
ぬぬ花はな小こ心こころ込こめつるつるががらら我われ
身みもも中ちゆう人にんをを仕つかををぬぬるる用もち

達をび下くから又主人を因この

まのねが存念は乃ある所あり

肩若くは果敢ふとりて主人あま

と形り授類とあるとありとも

元天地一神の身たるの積を

秋小住るとも彼本と住も現この

世をうりれ様縁とありし

也深く思ひひとりて一夜れのちえ

存教とも施し一合ともい

領河くまの實小意然をま

たゞびつらとせしむるに悉く跡は思
をんや彼令家支のんり
食ね下人ありとも能く云
茂列のしず和配は誠じ
べし又支の首をたて能

さぬふひあて下人れ
答と舉へしは皆も愚
も婦人の他ふなるままに
弟妻と忠憐む心あえん
ふららあか和睦へ婦人

の徳とくいよよくく散あるるべべー
陶とう淵えん明めいののいいつつるる彼かもも人ひと
のの子これれりり愛あい嬌きょうととははままはは
づづーーやや水みづ母ははんんをを忘わすれれままささ
毎まい々々にに

